

礼拝に向かう旅

[聖書]出エジプト記 13 章 17 節～22 節

さて、ファラオが民を去らせたとき、神は彼らをペリシテ街道には導かれなかった。それは近道であったが、民が戦わねばならぬことを知って後悔し、エジプトに帰ろうとするかもしれない、と思われたからである。神は民を、葦の海に通じる荒れ野の道に迂回させられた。イスラエルの人々は、隊伍を整えてエジプトの国から上った。モーセはヨセフの骨を携えていた。ヨセフが、「神は必ずあなたたちを顧みられる。そのとき、わたしの骨をここから一緒に携えて上るように」と言って、イスラエルの子らに固く誓わせたからである。一行はスコトから旅立って、荒れ野の端のエタムに宿営した。主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった。

[1] 「礼拝」は人生の一里塚

コロナウィルスと猛暑の 8 月も過ぎて、9 月になりました。皆様、ご体調は大丈夫でしょうか？ 私もそうなのですが、年を重ねる毎に「守られている感」を強く感じます。神様、この夏も守って下さって感謝です、という思いです。皆さまお一人お一人も守られ、今日ご一緒に礼拝を守らせて頂けることは本当に感謝です。また、今日お出でになれない方のためにもお祈りしたいと思います。

私たちは何故毎週のように日曜日の朝教会に足を運ぶのでしょうか？ そのことを自問自答することは大事なことだと思います。「もう習慣になっているので」と言われる方もいるでしょう。或いは「それは主を礼拝するため」とすぐにおっしゃる方もいると思います。または「聖書の言葉を聞くため」、「イエス様に会いに行くため」、「教会の兄弟姉妹との交わりを持つため」、「祈りの時間を持つため」、「感謝と献金を捧げるため」、「讃美歌と一緒に歌うため」など、決して一つではない、色々な気持ちが重なって教会に来るのではないのでしょうか。

私は、そういうことに含めて最近思うことがあります。それは、主日礼拝は、人生という旅の「一里塚」のようなものとも言えるのではないかということです。「一里塚」というのは、例えば昔、〇〇街道を歩いて行く時に、一里（4 キロ）ごとに目印となる塚を作って、そこで一息つく場所です。まだ長い旅の途中なの

ですけれども、自分がその旅のどこまで歩んだかの確認の場でもあります。私たちは人生の旅の中で、礼拝という一里塚において、何度も何度もそこで休息し、また力を与えられて歩み出すことが出来る場所を与えられているのではないのでしょうか？ もちろんそこで「**あなたの背負っている荷を下ろしなさい**」（マタイ 11:28）と招いて下さっているお方は主イエス様ですよ。

[2] 出エジプトの旅は「礼拝」をささげるため

今私たちは「**出エジプト記**」をご一緒に読んでいます。今日の箇所ではエジプト軍が追ってくる、それをいかに逃れて行くかという緊迫した場面です。そもそも何故イスラエルの民はエジプトから脱出しようとしたのでしょうか？ それは勿論彼らが休みなく奴隷状態のように扱われるという圧政下にあったからです。その叫びを神様は聞いて下さり、救おうとされたのです。けれども大事なことは、それはただ辛いから逃れたいということではなかったということです。5章1節で、モーセとアロンはエジプト王にこのように語っています。

「その後、モーセとアロンはファラオのもとに出かけて行き、言った。「**イスラエルの神、主がこう言われました。『わたしの民を去らせて、荒れ野でわたしのために祭りを行わせなさい』と。**」

この「祭り」というのは、**祭儀、礼拝**のことですね。これが彼らの**第一の目的**です。このままでは礼拝を守ることが出来ない。自分たちが生きる上で最も根本的なことは、まことの神様を礼拝することなんだと。「イスラエル」という名前は「**神様が戦われる**」とか「**支配される**」という意味があります。どこまでも神様に根拠があるのです。ですからこの「出エジプト」＝脱出というのは、「**礼拝への脱出**」と言っても良いのです。

このことは考えさせられます。今年の春、**新型コロナ感染**が広がり始めた頃、「ステイホーム」ということが強調されましたよね。緊急事態宣言が発令され、なるべく家にいて「**不用不急**」の外出は控えなさいと。色んな集まりが自粛するようになりました。教会で集まる礼拝も集団感染の場所になってはならないと、多くの教会は在宅礼拝を勧めたり、動画の配信をすることで礼拝を持つようになりました。ここで大切なことは、キリスト教会は、集まる礼拝を「**不要不急**」なことだと判断して集まることを休止したのではない、ということです。「礼拝」は、あってもなくてもいいような「**娯楽**」ではありませんよね。それこそイスラエルの民が危険を冒してまでも「**礼拝する**」ために脱出しようとした真剣な思い、それは、**自分の存在や命を支えるものとは何なのかをいつも確認し、また問うていた**のではないかと思うのですが、では私たち自身はどうなのか、それを突き付けら

れるような気が致します。

[3] ヨセフの骨とイエス・キリスト

私たちの人生の長い旅は、自分の思うようには進まないことがありますよね。皆さん色々な所でそう感じていると思います。しかし、もしかすると順風満帆というのは、神様を見失ってしまうという意味で危険な事なのかも知れません。やはり人生の旅には、一里塚のように立ち止まる場と時が必要なのだと思います。今日の箇所、神様はわざわざイスラエルの民を遠回りさせている訳です。本当なら一刻も早く出たいところを、神様の御計画に従って、この何百万という民は歩を進めて行きました。凄いことだと思います。モーセの力だけだったら、こうはいかなかったのではないのでしょうか。事実、21 節以下にはこうありますね。

「主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった。」

「雲の柱・火の柱」というのが具体的に何を指すのかはハッキリしません。火山や噴煙だったのか、または燔祭の献げものの炎だったのか、或いは不思議な現象だったのか分かりませんが、大切なのは、**彼らは自力で歩んで行ったのではない**ということですね。守られて、導かれて、その一步一步を歩んで行きました。

更に注目したのは、「ヨセフの骨」を携えて旅をしていたということです。これはヨセフの遺言に基づいています。19 節にある通りです。—**「モーセはヨセフの骨を携えていた。ヨセフが、「神は必ずあなたたちを顧みられる。そのとき、わたしの骨をここから一緒に携えて上るように」と言って、イスラエルの子らに固く誓わせたからである。」**—これは創世記の 50:25 にある言葉から引用です。

ヨセフの骨そのものに不思議な力がある訳ではないと思います。しかしヨセフという人物が、**ただ神様の恵みによって助けられ導かれてきた**、骨はその**神様の憐みを覚えるしるし**でもあったと思います。そして私たちは彼が、**イエス・キリストとの類似性**を持っていることをも思います。ヨセフは言ってみれば**虐げられた人生を送った人物**でした。兄弟に売り飛ばされ、死んだ者と扱われたのです。しかし神様の不思議な導きでエジプトの国で宰相にまでなり、カナン地方に飢饉がやってきた時、助けを求めに訪ねてきたあの兄たちに会い、涙ながらに和解をしたという物語が記されています。そのヨセフが言うのです。**「神は必ずあなたたちを顧みられる」**と。この約束がどんなに民の力となっていたことでしょうか。

しかし、私たちは知っています。神様は私たちの人生という旅の中に、雲の柱・火の柱にも勝る、またヨセフの骨にもはるかに勝る、「インマヌエル」＝「神我

らと共にいます」という約束のしるしを与えて下さったのです！ 主イエス・キリスです。このお方は、ヨセフとは対照的に骨が残されていないのです。どうしてでしょうか。この方は甦られて、今も生きておられるからです！ そして、聖霊と共に、いつも生きていて私たちの歩みを守り、導いて下さっているのです。

私たちの「人生」という旅に、イエス様がいつも伴っていて下さる。このお方は私たちの弱さを思いやって下さるお方です。罪は犯されませんでした、**罪を除いて私たちと全く等しい存在として**、この地上を一步一步歩んで下さったお方です。神の御子でありながら。そして、この方は**十字架**から逃げませんでした。それは、私たちを**罪の裁きから逃すため**だった、と言えるのではないのでしょうか？

今日、このあと**主の晩餐式**を執り行います。私たちはいつも心に覚えておきたいことは、あの晩餐の食卓は、主ご自身がご用意されたものであることです。主の思いは、私たちの思いを遥かに超えています。ですから、私たちは、ただ感謝して差し出される主の体と血汐を表わすパンと杯を「**アーメン**」と受け取れば良いのです。あのパンと杯は、主の愛そのものです。それが、私たちの大きな慰めです。また、生きる力です。私たちの一週間は、主が甦られた日曜日、礼拝に始まって礼拝へと至る旅路です。それはまた、人生の旅路の終りに、私たちは確かに全ての重荷から解放されて主とまみえ、賛美を捧げる、その**天上の大きな礼拝**に向かうための「今日」をご一緒に生きているということです。感謝したいと思います。

甦られた主イエス様は言われました。「わたしは世の終わりまでいつもあなたと共にいる」（マタイ 28:20）と。

お祈りを致します。

神様、時々人生の旅路で、つぶやいてしまうことがあります。神様、どうしてこのような道を歩まされるのですか、と。あなたはそんな私たちの心を知っていて下さいます。だからこそ、こんな弱く罪深い私たちのために主イエス様は来て下さり、私たちの旅路を共に歩んで下さることを心より感謝いたします。「まず神の国と神の義とを求めなさい」。すぐに近視眼的になってしまう私たちです。どうぞ、いつも上を見上げながら、日々、「私はあなたと共にいる」というあなたの声を聴きながら歩む者として下さい。またこの教会も、ただあなたの導きの中を進むことが出来ますように。常に聖霊が励まし、慰め、また軌道修正も与えて頂きながら、歩ませて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。